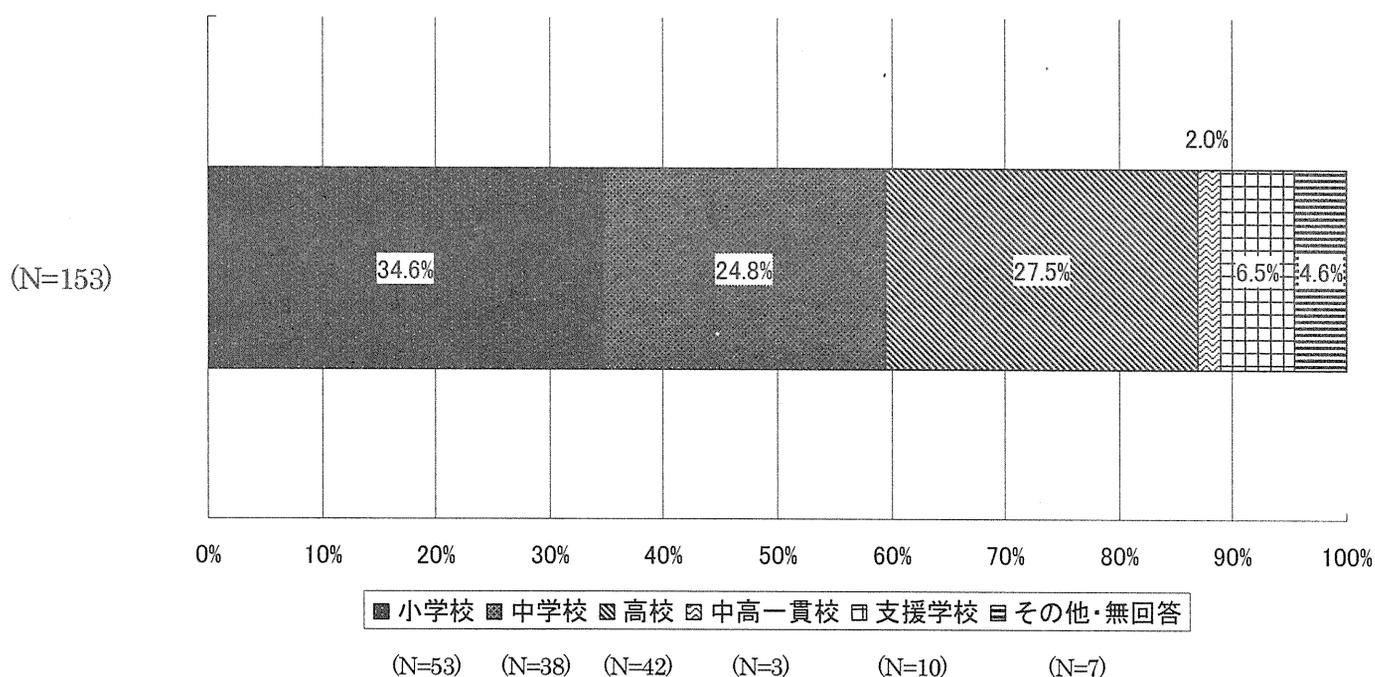


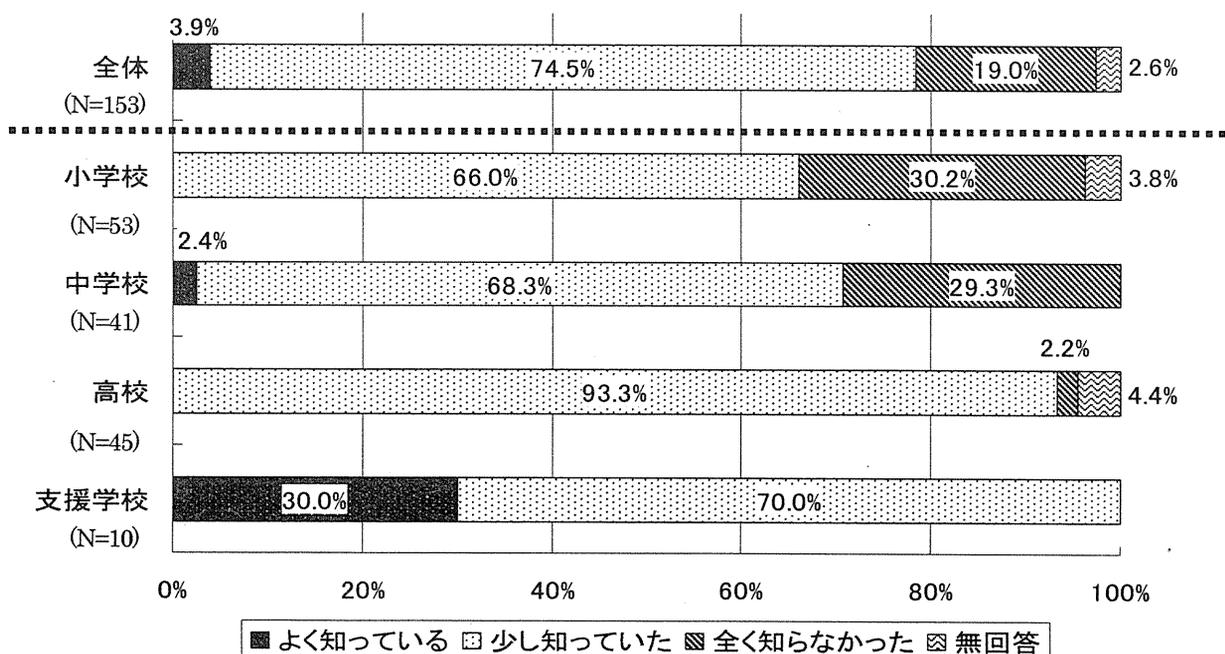
イ. 調査結果

アンケート回答者の内訳（※学校数ではなく、回答者数で区分。以下同じ。）

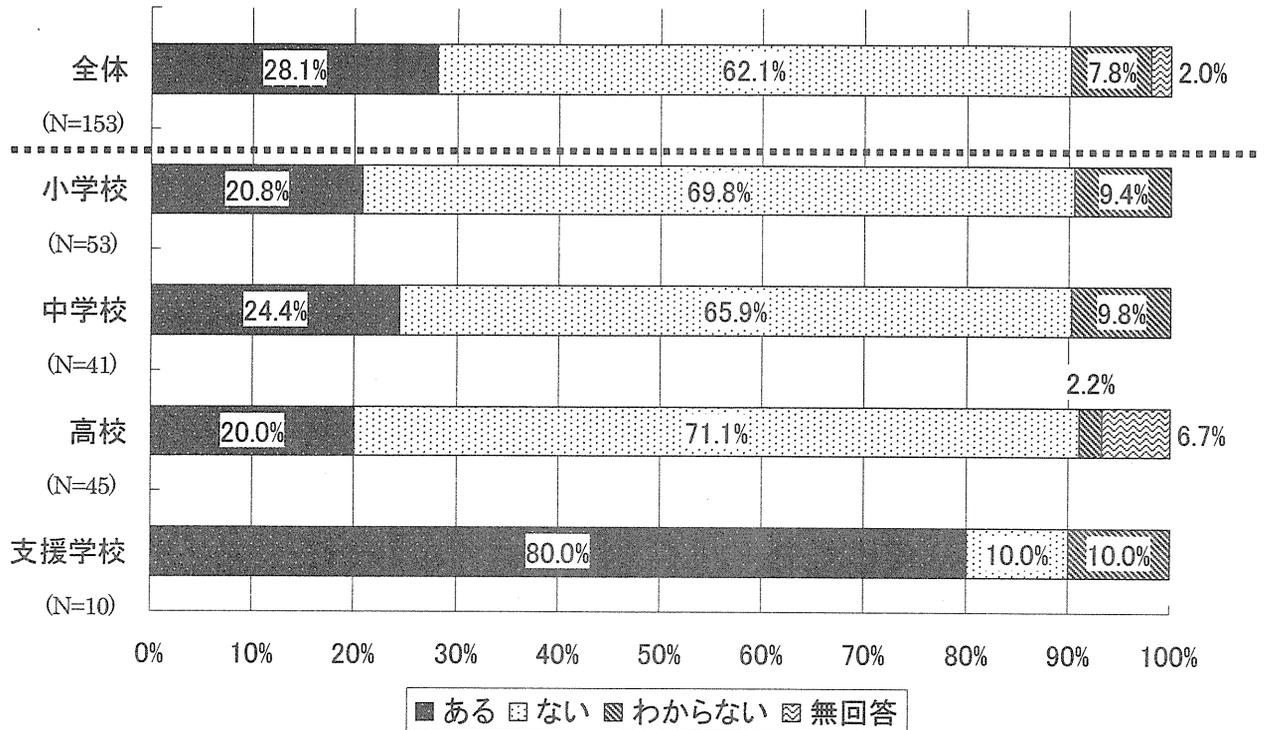


(※以下、中高一貫校の3名については中学校・高校両方にてカウント)

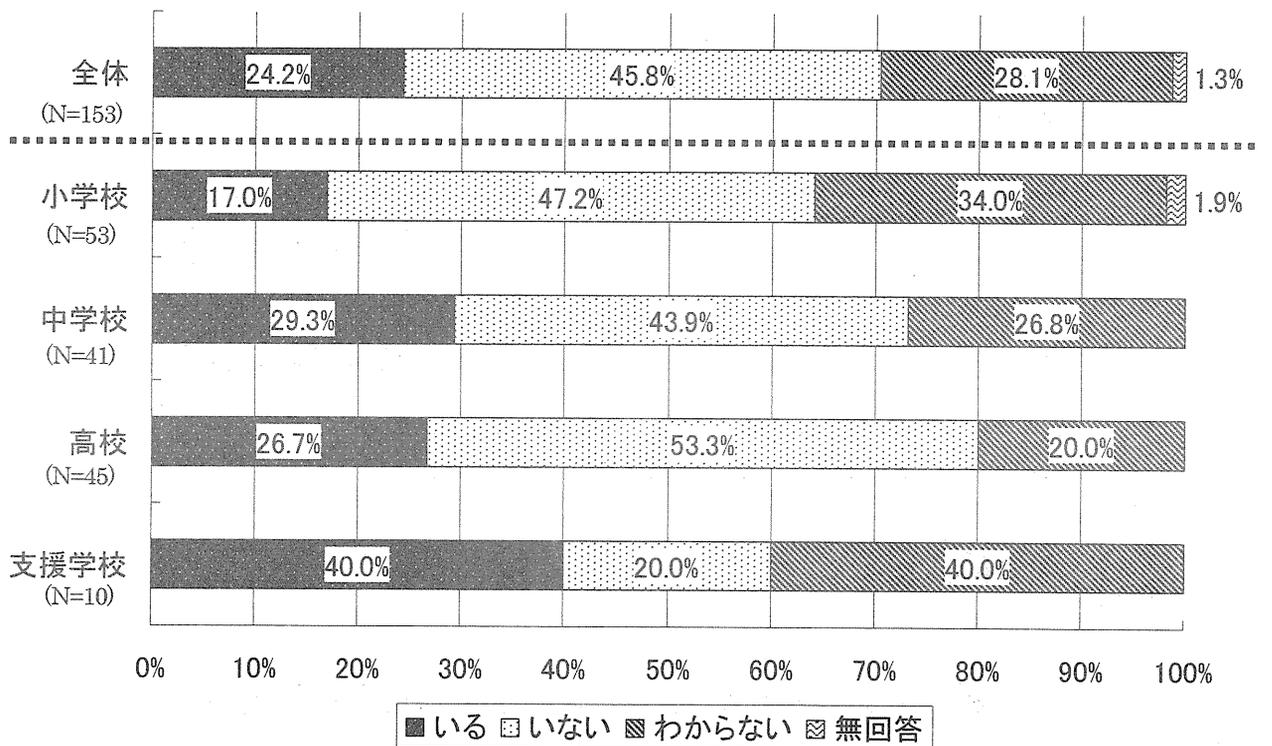
Q1. 高次脳機能障がいについて、本日の研修を受けるまで知識はありましたか



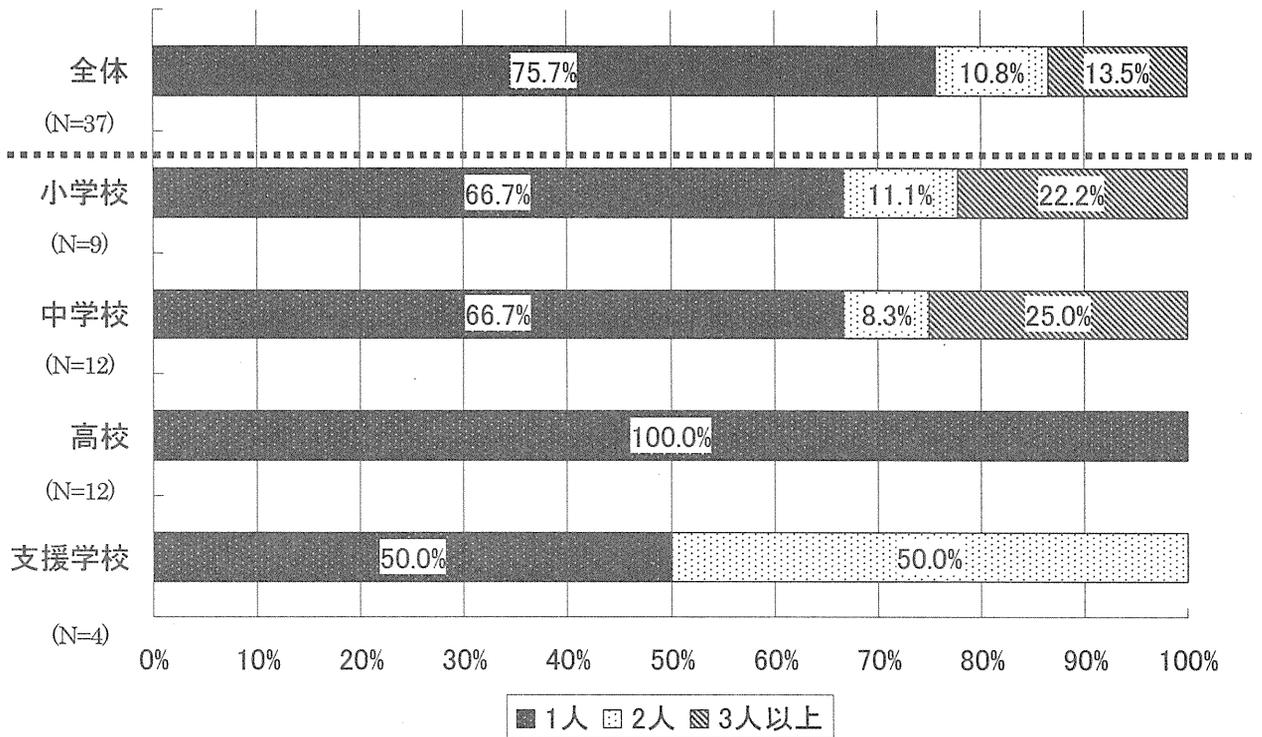
Q2. これまで「高次脳機能障がい児・者」を担任又は支援した経験はありますか



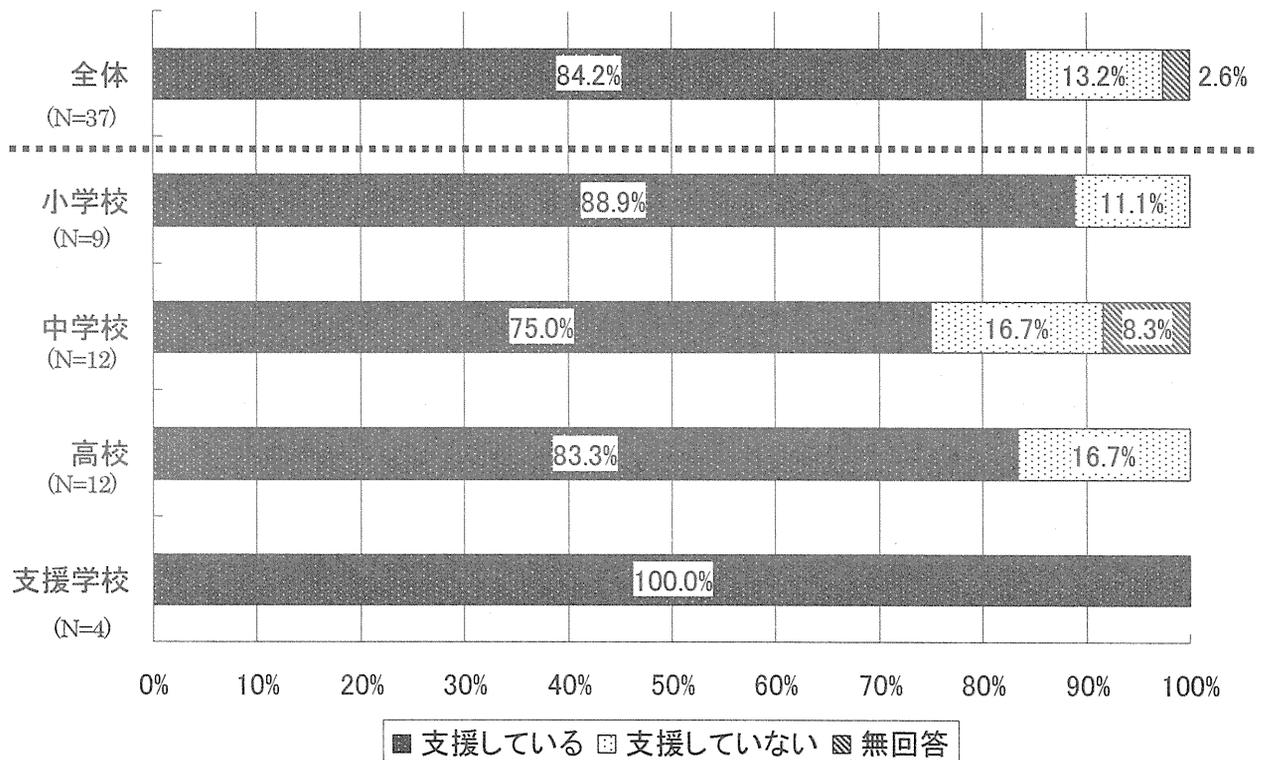
Q3. 皆さんの勤務先（学校）に、高次脳機能障がいがある、又はその疑いのある児童、生徒（以下「高次脳機能障がいのある児童、生徒」という）はいますか



※「いる」場合の人数



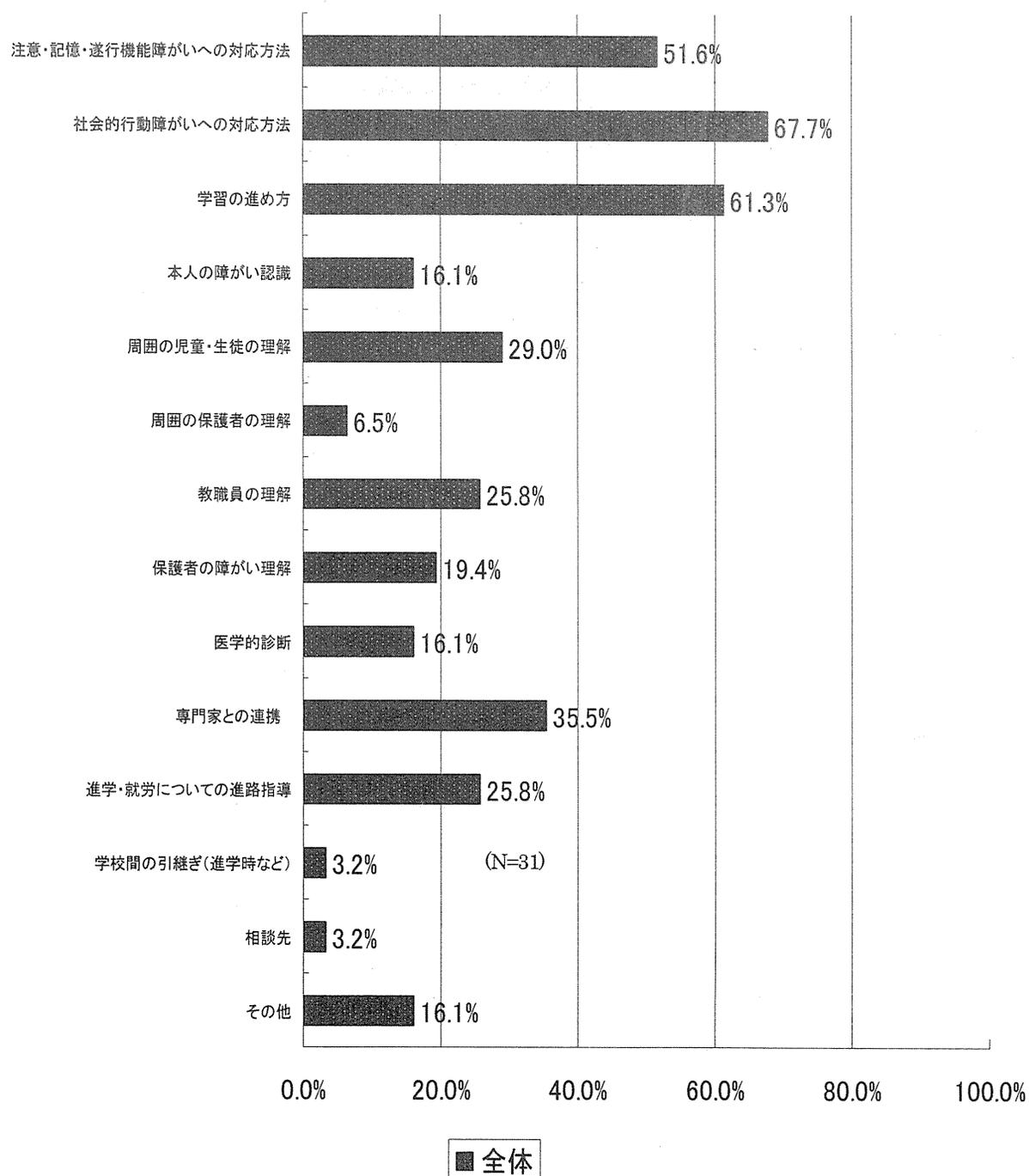
Q4. Q2で高次脳機能障がいのある児童、生徒が「ア. いる。」と答えた方にお尋ねします。学校として、何らかの支援をしていますか



「支援している」と答えた方の支援の具体的な内容

支援担当が教科によって入り込んで指導している。(小)
支援学級担任等による支援(小)
支援級に在籍。国・算は支援級で少人数または個別学習(小)
教職員への共通理解、学習支援(小)
支援学級に在籍し、担当者を設け支援に当たっているが、十分とはいえない。(小)
支援学級に入級 学習面での支援(小)
校外学習での付添配慮(小)
介助員と共に生活学習サポートをしている。(中)
技能教科等の入り込み支援、連絡帳をもうけ保護者との連携(中)
ケース会議(中)
支援学級入級・登校支援(迎えに行く)(中)
支援学級入級・登校支援(教師による車での迎え)(中)
支援学級担当を中心に情報交換会を定期的に行い共有し、指導に当たっている。(中)
教職員の研修、まわりの生徒に対する理解、本人へのアプローチ(中)
授業・実習等の配慮・声かけ、保護者との連携(高)
支援委員会、修学保障委員会、主治医訪問など(高)
情報の共有等(高)
教科・学年に勉強のフォローを中心に依頼(高)
申し出の内容に即してできる範囲で(高)
具体的にはこれからだが(入院中)病院側と何度もカンファレンスをしている。(高)
本人、保護者との面接、連絡(高)
医療相談(支)
個別に対応(支)
医療受診支援、情報提供、療育手帳取得支援(他)

Q5. Q4で「ア. 支援している。」と答えた方にお尋ねします。支援している中で、どのようなことでお困りですか。あるいは、どのようなことが課題となっていますか。(最大5つまで回答可)



学 校 別

注意・記憶・遂行機能障がいへの対応方法

社会的行動障がいへの対応方法

学習の進め方

本人の障がい認識

周囲の児童・生徒の理解

周囲の保護者の理解

教職員の理解

保護者の障がい理解

医学的診断

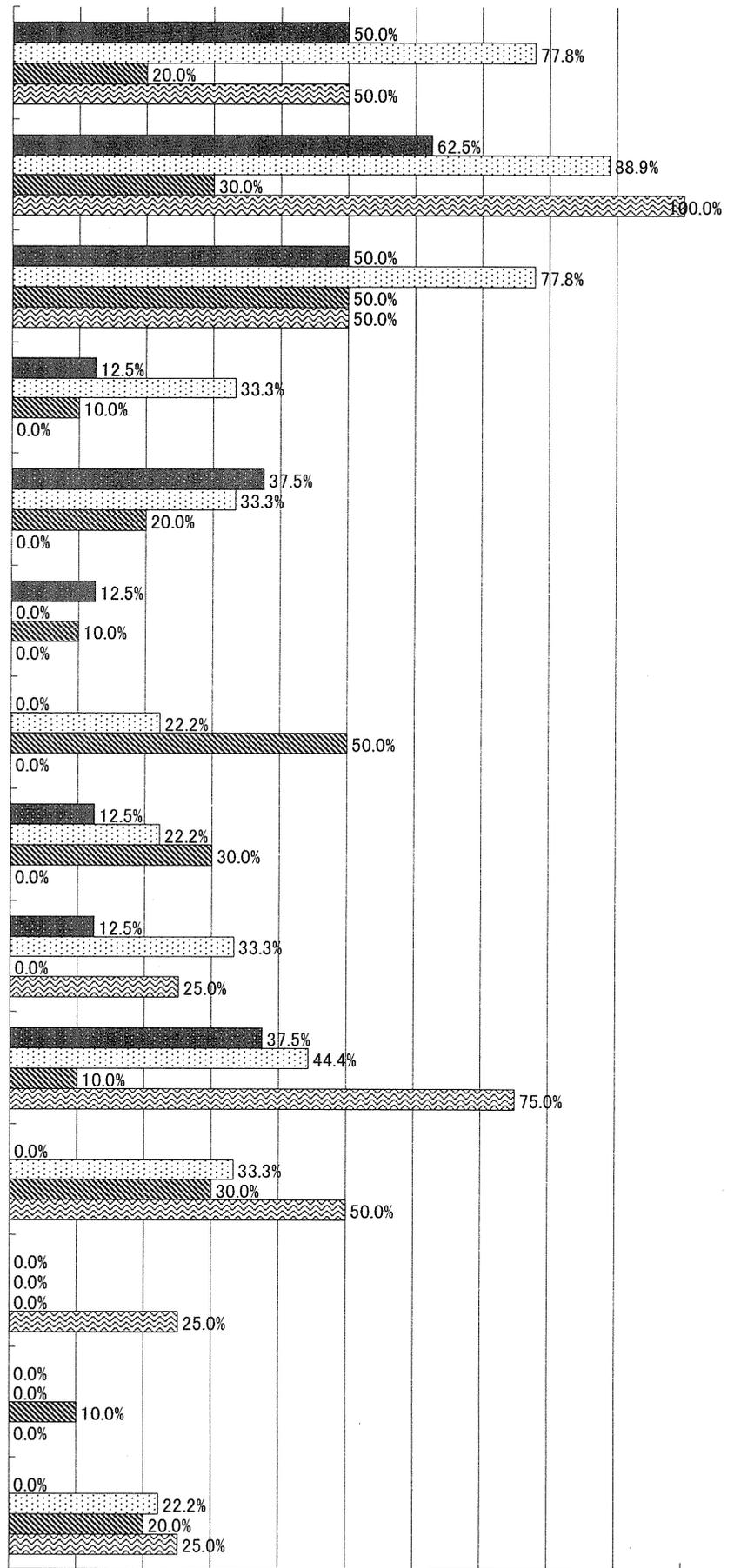
専門家との連携

進学・就労についての進路指導

学校間の引継ぎ(進学時など)

相談先

その他



0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%

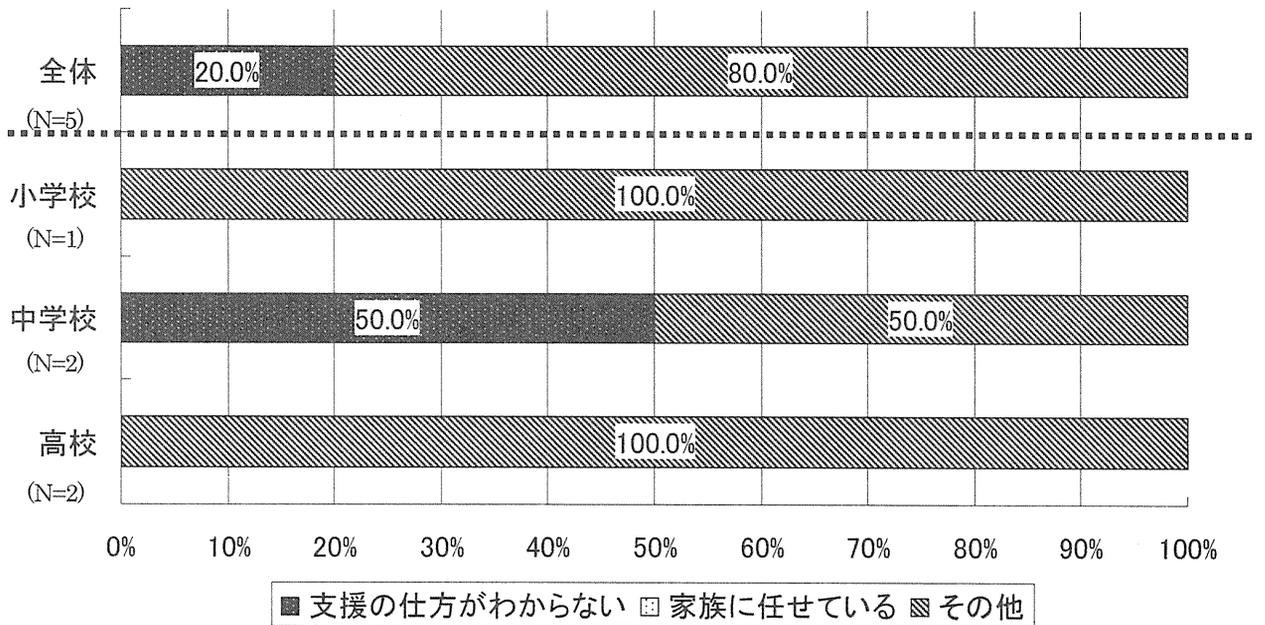
■ 小学校 ■ 中学校 ■ 高校 ■ 支援学校

(N=8) (N=9) (N=10) (N=4)

セ. 「その他」と答えた方の内容

発語（言葉の理解）の回復（中）
保護者への支援（中）
告知について（中）
手帳の交付がどういったものがあるかなど（高）

Q6. Q4「イ. 支援していない。」と答えた方にお尋ねします。支援していない理由は何ですか



「その他」と答えた方の具体的な内容

保護者が支援を拒否している。（小）
保護者の方針（中）
入院していた病院の指示で見守る程度（高）
とても軽度のため、支援の必要がない。（高）
医者から”特別な支援”は必要ないと言われたので、簡単な支援はしていた。（高）

Q7. 高次脳機能障がいのある児童、生徒を学校で受け入れるに際し、何か配慮されたことはありますか。

個別指導（に配慮した。）退院する時に、主治医、担任、学校長も参加してもらって、復帰する学校側との引継ぎ、説明（を行った。）（小）
教育相談、巡回相談等を実施（小）
教職員の共通理解（小）
職員間での共通理解、保護者との連携、支援級への入級（小）
高次脳機能障がいについてのさらに詳しい知識（小）

病院との連携 (小)
専門機関との引継ぎ (小)
乳児のころからの障がいだったので、普通の知的障がいとして受け入れた。(小)
本人がどこに問題を感じて困っているかを理解し、対応を考えていきたい。(中)
学校に〇〇室と大きくビニールテープ等で表示し、迷わないようにした。鉄(パイプ)にクッションを巻きつける、段差にテープを貼る、等(中)
入学前の保護者との面談実施、個別の指導計画の作成と小学校からの丁寧な引継ぎ(中)
校内で研修会を持った(中)
支援学級への入級、通常の学級の教室配置・階段の手すり設置(中)
施設面の改善(手すり等)、生徒への障がいについての説明(教師、保護者から)、Drとの連携、復学前の体験学習(中)
小学校との引継ぎ、保護者との面談(情報等も)、学校の施設面(中)
教室・全校生徒及び学年の生徒への理解(中)
介助員の配置、担任教員の力量(中)
要全介助(身体的)の生徒であったため、教員が常に傍らにつき、対応していた。(ただし、生徒達の交流を妨げないように気をつけていた。)(中)
個人情報(高)
体育の授業上の配慮、保護者との密な連絡、就職活動時の配慮、考査時間の延長。長期の意識不明後の復学。脳の損傷が原因で手・足・口が不自由なことなどを周囲は自然に見守ったり、手助けしたりできた。(高)
主治医と担任、養護、学年主任など同席して学校としてどうかかわっていくか、話をした。(高)
成人している人だったので、体育の授業のみ別メニューで実施する以外は、特に本人からの要望はなく、トラブルも卒業まではなしでした。(高)
保護者、専門家との話し合い。(高)
特にないが、できるだけ多くの教職員とかかわるよう心掛けた。(支)
病院につなげた。(支)
意欲の低下に対する授業内容への配慮、対人関係、コミュニケーション(待つこと、スキル他)(支)
子どものアセスメント、行動チェック、個別の教育支援計画(支)
当初は保護者の教室内にて同席・管理を認めていた。(支)
教育相談をして、必要な支援の中で学校でできることはやっていく 個別指導(支)
前段階での学校や施設等と引継ぎを密に行い、就学してからも連絡を取り合うシステムを作っている。(発達障害の児童生徒も同様)(他)

Q8. 高次脳機能障がいのある児童、生徒に対して、今後、どのような支援が必要と思われますか。

母親、父親、兄弟姉妹など家庭への支援（長期的に）（小）
社会的行動に障がいがある児童のまわりの子どもへの理解（小）
まずは教職員全員がこの障がいについて共通理解が必要。児童に対しては、そばからアドバイスができるような人的配置が要ると思う。（小）
職員が障がいについて知ること。支援計画など。家族との協力的なとりくみ。（小）
人的支援及び研修制度の充実（小）
理解した上での取組み（小）
継続した見守り 特に担任が変わる時の引継ぎ（小）
支援教育の考え方ややり方をうまく活用する必要があると思われる。（小）
高次脳機能障がいが見えない現状をどのようにして見えるようにしていくのか（研修・啓発）（小）
教職員の基本的な（研修）理解（小）
今日話を聞いて、まわりの教師、保護者の理解がもっと必要だと感じた。（小）
個々のファイルを幼→大まで引き継がれていくという事が本当に大切だと思われる。（小）
児童のニーズを把握するため、個別の教育支援計画の作成が必要（小）
個別に支援してやれる人員（支援者）確保（小）
障がいに対し、正確な理解と児童の状況を職員が引き継いでいくファイルが必要（小）
その存在を十分に周知すること（小）
できることを繰り返して、成功体験を積んでから次のステップへつなぐ支援をしていこうと思った。（小）
高次脳機能障がいについての知識と児童・生徒に対する理解と対応を広く知り支援できたらいいなと思う。（小）
通常学級での在籍時には、スクールサポーターやT.Tの協力をえて、支援の手助けをしてもらう。（中）
高次脳機能障がいについて、正しい知識・理解を、全職員又家庭がもつことで、こどもの状態に応じた体制の確保（中）
児童、家族の理解（中）
その児童にたずさわる人（教師も含めて）の理解（中）
「高次脳機能障がい」のことを、もっとよく知ってもらう必要があると思う。（中）
教師の全体的な理解の研修、支援のコーディネート、本人、家族のニーズを聞き取り組めるもの（公立校で可能なもの）今は、DSにそういう機能があるので、遊び感覚で計算機、電子辞典を使わせる。施設面では、まだハードソフト面で改善しなければならないことが山積みである。（中）
専門知識を持った職員配置（中）
支援教育（中）
本人の障がい認識・保護者支援（中）

個々にあった目標を明確にし、本人と一緒に目標設定していく。(中)
よく頭痛を訴える子供がいる。近くの病院で診てもらっているが、特に治療は必要ない、ストレスからだと言われている。高次脳機能障がい疑ってみるのも、問題解消の手立てになるかもしれないと思った。(中)
体調不良で休むことが多いため不登校になっていかないか心配。母親が再発の繰り返しによる長期の看病疲れでうつの症状(子どもの病気への不安、再発しないか、経済的不安等々)を呈しているため、母親への支援が必要。(中)
正しい知識、実践例。(中)
家庭での様子を把握しながら、繰り返しアプローチをする。(中)
私自身や職員の今回のような研修がまず大切。(中)
進路選択に向けての課題 保護者の本人理解をどう進めるか。(中)
教職員全体の共通理解(中)
家庭とのバランス(中)
進学を決めているが、後に、就職に向けての支援が必要になるとされる。(高)
クラスへの理解(高)
教職員全体の理解、教育課程の柔軟な対応(高)
学習の進め方、進学・就職等に関する支援、手帳交付を含めた専門機関との連携(高)
みんなに優しい教育と連携(高)
現状を知り、理解すること(高)
疑いがある場合、医療機関の紹介等をする必要(高)
何ができないのかを早く見極める(観察)、教員全員の共通の認識、理解、生徒間の理解(高)
学校保健調査(入学時の時点)に、後天性脳損傷の要因項目を作成し、把握していくべきかと思った。(高)
進路保障の支援(高)
支援体制を整えること(高)
今日話を聞いて環境調整をいかに今後につながるものにするかが大切だと思った。(高)
この障がいに対する認知をもっと広めることではないか。(高)
学校と家庭、医療機関等との協力体制 申し送りの徹底(高)
啓発、研修を受けた者も周囲に広げる義務があると思う。(高)
保護者とのより一層の話し合い(高)
先ずはかかわる全職員の高次脳機能障がいに対する研修と理解(高)
卒業後もずっと支援してもらえること(支)
”できないこと”への理解と”できること”への支援(支)
高次脳機能障がいといっても多様。同じ支援がどの子にもあてはまるかは疑問。(支)
社会に出てからの周囲の理解と支援の実践(支)

病態を学校の教師が理解すること、必要な支援のHowtoを共通理解すること 家庭との連携を密にするために、児童生徒は学校での様子、以前との変化等について家庭や主治医に伝えること (支)

個別の教育支援計画 移行支援計画 (支)

より専門的な知識、技能を持った教員がかかわっていくこと (他)

Q9. その他、本日の研修へのご意見・ご感想等をお書きください。

できれば、通常学級に在籍していた子が、支援学級に在籍することになった例などで、気をつけることなど聞いてみたかった。(小)

研修の時間設定が早すぎる。(小)

あまり知られていないですが、確実に身近かになってきているこの障がいについての研修は、もっと広く行ってほしいと思います。本日はありがとうございました。(小)

いつか聞いてみたいと思っていた研修だったので、とても興味深く聞いていました。児童の情報は、よほどでない限り、細かなことは全体には知らされません。もしかしたら、該当する児童がいると思って考えさせられました。(小)

ライフステージを意識して長期にわたって支援の継続、情報の共有をしていく必要がわかりました。事例をもう少し沢山の人数を知りたかった。ありがとうございました。(小)

発達障がいへの対応とほぼ同じであるということがわかりました。(小)

今日の話だけではまだ十分に理解できなかった。(小)

よかった。より研修を深めたい。このような機会をお願いしたい。(小)

具体例をあげてわかりやすく話していただき、ありがとうございました。発達障がいのある子どもたちにも段階的な取組みの指針を活用していきたいと思います。(小)

幼い子だと脳障がいの前後の違いがわかりにくく、先天的な性格がわかりにくいと思った。(小)

本日はありがとうございました。3回目ということでしたが、1, 2回も聞きたかったです。又、本日の事例の児童が、年を重ね成人になったらどうなっていくのでしょうか。(小)

初めて参加しましたが、アウトラインがよくわかりました。(小)

発達障がいと思われる児童の中で、高次脳機能障がいであるかどうか分からずにいる場合もあるのではと思いました。その見極めや判断が難しいと感じました。(小)

段階的取組みの長期的指針の表と行動を実現するための短期的方略手順の図は、今取り組んでいる支援の参考になりました。ありがとうございました。(小)

高次脳機能障がいという言葉は、私の近くの職場では、まだあまり使われていません。事故だけでなく、打撲での可能性も考えていきたいと思いました。(小)

始めて研修に参加したので障がいの定義をレジメに書いてほしかった。専門機関は大阪ではどこか。プレゼンが全く見えなかったのが、何か所かスクリーンを用意する必要がある。マイクの音が大きすぎるさくきこえた。調整をきちんとすべきです。

現在、発達障がいの児童を担当しているが、その子たちへの支援の方法として今日の内容を活用していきたいと思う。ありがとうございました。(小)

発達障がいの児童への取組みにも生かせること(共通すること)も多く、勉強になりました。わかりやすく説明していただき、ありがとうございました。(小)

現在高次脳機能障がいと診断されて来ている子はいないが、知的障がいや発達障がいの中に支援として効果的と思われるものがあつたので試みてみたい。(小)
とても為になりました。ただ少し話しが速かつたので、ついていくのに精一杯となつてしまいました。(小)
本日はありがとうございました。今後、高次脳機能障がいをもつ子どもたちに出会つたら、この講演で聴いたことを活かしていきます。(小)
家庭との連絡を密に取ることが大切なんだと知りました。(小)
情報の共有が必要で、本校にいる児童についても調べたいと思います。(小)
子どもの成功体験・安心感がとても重要になるということがわかりました。なかなかこちらの意思が伝わらず、どうしてよいのかと思うことが多々ありますが、スモールステップで、子どもの気持ちを大切に支援していこうと思います。(中)
発達障がいの子どもにも対応できる部分が大いにありました。対症療法→原因療法に対して、アプローチしていくということなど。(中)
障がいをもつ子供への対応や伝え方などが分かりとても良かつた。T.T.で入っている授業での支援の仕方も分かりやすかつたです。(中)
具体的な、その障がいをもつ子どもの映像を見て、実際どのような行動があるのか見てみたかつた。(中)
初めて高次脳機能障がいについて聞いたので、勉強になりました。(中)
具体的事例をだしていただき、ありがとうございました。(中)
実際のケースを踏まえ、見立てからアクションまでの方略を知ることができた。もりだくさんであつたが、興味深かつた。(中)
高次脳機能障がいについて、とてもくわしく学ばせていただき、ありがとうございました。(中)
発達障がいのある生徒にも有効な話でした。(中)
方針方略を参考にさせていただき自分のノウハウに付け加えて活用していきたいと思います。(中)
講義の速度が速すぎて、よく理解できなかつたというのが正直な感想です。(中)
本校では、保護者の要求で支援学級へは通級していない。そのことで、担任、学年の教師が対応に困難なことが多い。(中)
思いあたることが多く、よくわかりました。(中)
短い時間で、たくさんの事を学べました。(中)
有意義な研修でした。有難うございました。(中)
たいへんわかりやすく、日常のとりくみへのいいきっかけになりました。(中)
A君の例から高次脳機能障がいによる子どもの支援の方法でこんなに大きく変化するのか驚いた。支援の方法はとても難しいが、勉強していきたい。(中)
本日は、わかりやすい説明、ありがとうございました。高次脳にかかわらず、アプローチの方法は、現場で役立てたいと思います。(中)
ほとんど知識がありませんでしたが、新鮮に学ぶことができました。(中)
わかりやすいお話でした。(中)
高次脳機能障がいについては、詳しく知らなかつたので、今回のお話で支援方法まできちんと教えていただき、とても勉強になりました。(高)

発達障がいのある生徒にも対応できることが理解できました。(高)
わかりやすく説明していただいて、よく学習ができました。(高)
とても具体的でよかったです。本、参考にさせていただきます。(高)
支援教育の中で生かせると思う。基本は他の生徒と同じだが、何よりも、高次脳機能障がいについて知識をもつことは必須だ。(高)
具体的でわかりやすかった。高次脳機能障がいの生徒が入学してきた時生かせると思います。(高)
高校での支援の方策はどうなるのか。具体例がほしかった。(高)
わかりやすく、よかったです。(高)
理解しやすい、誠実な語りが好感がもてる。即効性のある実践対策になる。(高)
内容がまとまっており、スッキリした内容でとても勉強になりました。手探りで対応していたことから、計画的な支援への対応に変化させられそうです。(高)
脳損傷による高次脳機能障がい、あまり把握されていないことがわかりました。いい勉強になりました。ありがとうございました。(高)
ありがとうございました。高次脳機能障がいの高校生の就労問題などがきけたら・・・と思います。(高)
発達障がいとこの障がいの関係がわかりました。(高)
本校に設置されている共生推進教室での取り組みをあとおしして下さる内容となっていて、とても心強く思いました。(高)
もう少し高次脳について詳しく聞きたかった。(高)
今後の支援に役立てたい。(高)
とても内容が具体的でわかりやすかったので、勉強になりました。「段階的方略法」の図がとてもわかりやすかったので、これをもとに考えていきたいと思いました。(高)
難解である。イメージがわからないままの研修であったと思います。(高)
高次脳機能障がいの生徒はいませんが、発達障がいの生徒はいます。支援の基本は有効であるということなので活用していきたいと思います。(高)
具体例での説明が分かりやすかった。(高)
カミングアウトを本人及び保護者が拒んでいる時、環境調整ができません。保護者が高次脳機能障がいの時の対応がわかりません。(高)
こういう講演会が今後もいろいろな場であればいいと思います。(支)
本日しか受講できなかったのが残念でしたが、有意義でした。(支)
初めて参加させてもらったので、先生の使われる用語についていくのにせいっぱいでした。(支)
もっと長くお話を伺いたかった。前回の研修会に引き続き大変勉強になった。(支)
時間は短かったが、内容はよかった。(支)
「高次脳機能障がい」かもしれない児童生徒がいるかもしれないと思いました。こうした障がいのあることも教員に周知し、よりの確に指導できる体制を作っていきたい。(他)
事例を通した具体的なお話でイメージしやすかったです。若年期での受傷発症の場合、対人関係面での発達課題の達成も大きな問題になることがよくわかり、エリクソンとラスクの表もとても参考になります。ありがとうございました。(他)

(近畿別添資料 3)

学校における高次脳機能障がいの実態に関するアンケート結果

ア. アンケート調査の概要

① 調査の目的

厚生労働省科学研究費補助金障害者対策総合研究事業「高次脳機能障害者の地域生活支援の推進に関する研究」では、平成21年度から3か年計画で府内各学校における高次脳機能障がい者の就学支援に関する体制の構築について研究することとしている。

平成23年度においては、これまでの成果をまとめると同時に、大阪府内の小・中・高・支援各学校を対象に小児期受傷・発症の高次脳機能障がいの実態について調査し、学校現場における高次脳機能障がい児・者の現状を把握することで、研修、相談等高次脳機能障がい児・者への支援策の検討に役立てるとともに、分担研究者が今後必要となる支援方を国へ提言するための基礎資料とする。

② 調査対象と調査方法等

- ・調査対象：大阪府内（大阪市、堺市を含む）の小・中・高・支援学校 計1,879校
- ・調査方法：調査票を電子メールまたは逡送にて送付。回収は電子メールまたはFAX（堺市のみ）により返信
- ・調査期間：平成23年11月1日～30日

③ 調査票の回収結果

調査種類	配布数	回収数	回収率
① 小学校	1,041校	709	68.1%
② 中学校	533校	337	63.2%
③ 高等学校	260校	209	80.4%
④ 支援学校	44校	31	70.5%
⑤ 中等教育学校	1校	1	100.0%
合計	1,879校	1,287	68.5%

※⑤については、対象数が少数であるため、②に含めて集計している。

④ 調査の留意点

- 集計結果はすべて、小数点以下第2位を四捨五入しており、比率の合計が100.0%にならない場合がある。
- 設問については、項目を選択する選択式のものとして自由に意見を記載する記入式がある。
- 選択式については、単数回答（項目から1つを選択するもの）と複数回答（項目から複数選択できるもの）がある。
- 複数回答の場合、集計の結果の比率の合計が100.0%にならない場合がある。
- 本文中の「N」は設問のサンプル数（集計対象者数）を表している。

⑤ アンケート調査用紙

別紙のとおり（電子メールによる回収は、プルダウンメニューで実施）

Q5.高次脳機能障がい児・者の支援に際し、現在、不足している取組や情報を選んでください(最大5つまで複数回答可)

1. 注意障がい・記憶障がい・遂行機能障がいへの対応方法

(用語の意味については別紙資料参照)

2. 社会的行動障がい(感情コントロールの低下・意欲低下など)への対応方法

3. 学習の進め方

4. 本人の障がい認識

5. 周囲の児童・生徒の理解

6. 周囲の保護者の理解

7. 教職員の理解

8. 保護者の障がい理解

9. 医学的診断

10. 専門家との連携

11. 進学・就労についての進路指導

12. 学校間の引継ぎ(進学時など)

13. 相談先

14. その他(具体的に:)

Q6.高次脳機能障がいについて、相談するところがありますか

1. ある(具体的に:) 2. ない

※その他、ご意見・ご提案等ございましたらご記入ください。

質問は以上です。

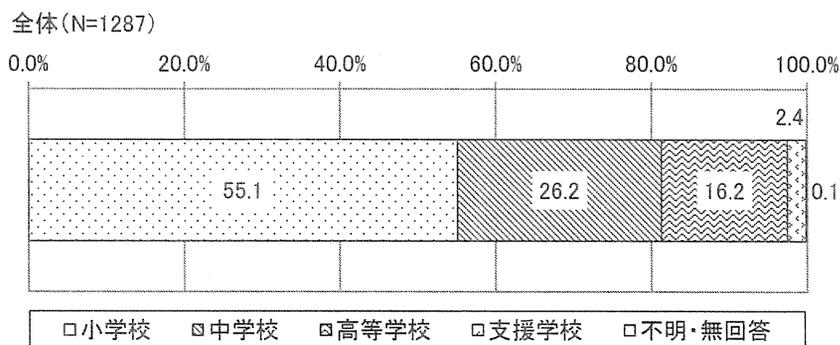
回答漏れがないか、再度ご確認をお願いします。

ご協力ありがとうございました。

イ. 調査結果

Q1 学校種別 (単数回答)

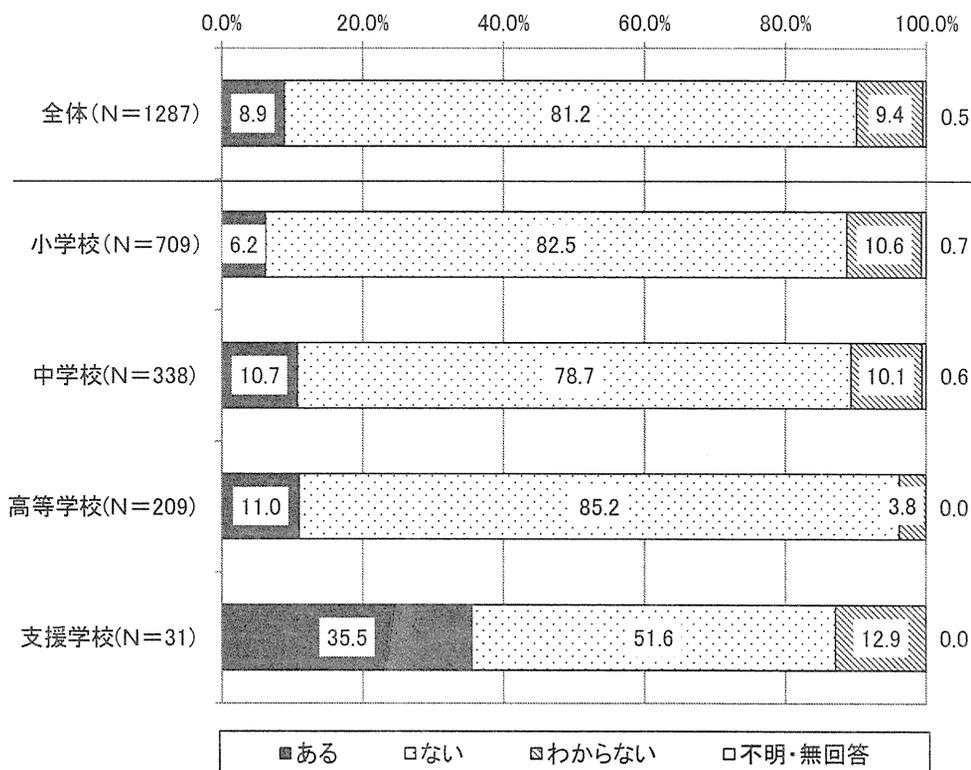
アンケート回答者の内訳 (※学校数ではなく、回答者数で区分。以下同じ。)



Q2 「高次脳機能障がい児・者」を支援した経験はありますか。(単数回答)

高次脳機能障がい児・者の支援経験についてみると、全体では「(経験が)ない」への回答が81.2%で、「(経験が)ある」は8.9%となっています。

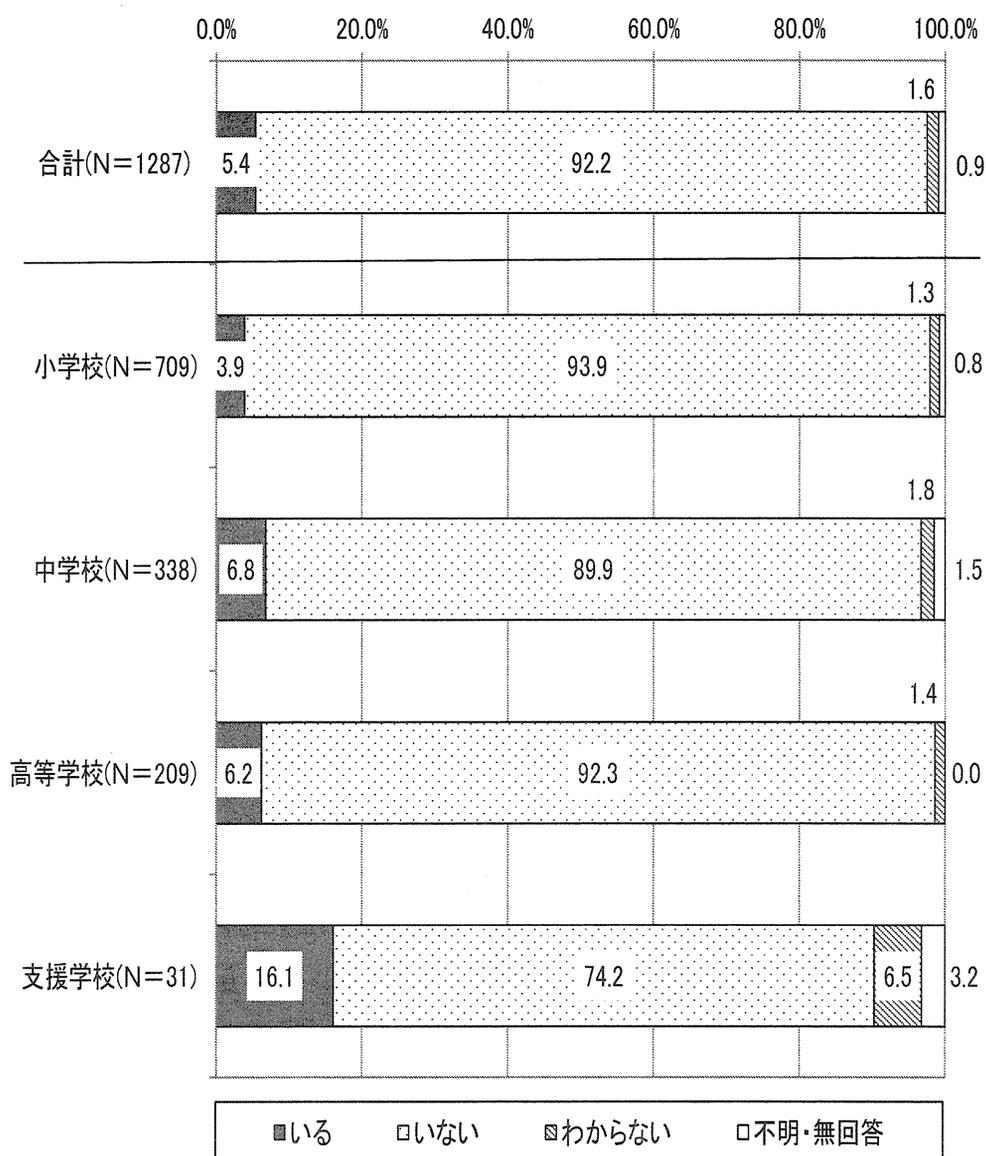
学校別にみると、「(経験が)ある」の割合は、支援学校が最も高く、35.5%となっています。一方、最も低いのは、小学校の6.2%となっています。



Q3 事故や病気（脳炎や脳血管疾患など）などにより、高次脳機能障がいと診断されている児童・生徒は在籍していますか。（単数回答）

高次脳機能障がいの児童・生徒の在籍についてみると、全体では「いない(在籍していない)」の割合が92.2%で、「いる(在籍している)」は5.4%となっています。

学校別にみると、「いる(在籍している)」の割合は、支援学校が最も高く、16.1%となっています。一方、最も低いのは小学校で、3.9%となっています。

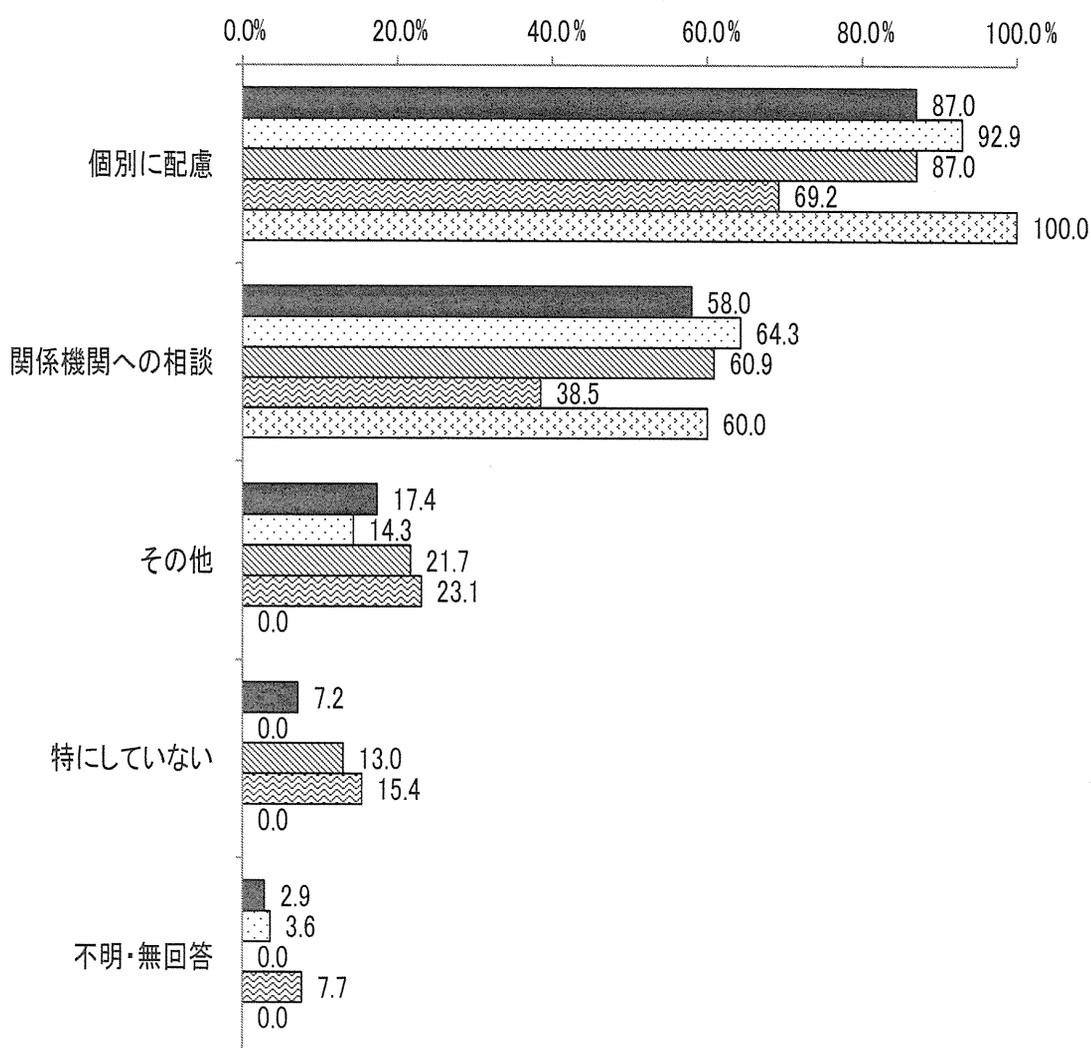


Q4 ※Q3「いる」に回答した方※

具体的にどのような支援をしていますか。(複数回答)

どのような支援をしているかについてみると、すべての学校区分で「個別に配慮」が最も多く、次いで「関係機関への相談」、「その他」、「特にしていない」の順となっています。

学校別では、高等学校は、他の学校区分に比べ「個別に配慮」と「関係機関への相談」が少なくなり、また、中学校、高等学校で「特にしていない」が見られます。



■全体(N=69) □小学校(N=28) ▨中学校(N=23) ▩高等学校(N=13) □支援学校(N=5)

※Q4の「具体的に」の内容 (抜粋)

①「個別に配慮」

小学校

内容
本人の傾向や特徴など病院から診断された内容を学校も(保護者と)共通理解している。定期的な通院での様子や学校での様子などを保護者とともにも共有できるようにしている。
移動や運動のとき、職員が一人付き添っている。
支援学級に在籍し、個別の指導計画を立て支援を行っている。
支援学級で国語・算数を学習する。体育科の学習を見守り、補助する。
支援学級において児童に合った学習内容を精選して学習している。
教師の指示が通りにくかったり、ぼんやりしたりしているときに担任(支援者がついているときには支援者も)が声をかけて集中させたりわかりやすく説明をしたりしている。
学習支援、食事介助、移動補助。
授業に入り込んで分かりにくいところを説明したり、作業しやすいように支援。
支援学級にて個別の学習支援及び生活支援
学習面では、落ち着きがなかったり、集中が続かないことがあるため、座席を落ち着く場所にしたり、担任からの声かけ・励ましなどの支援をしている。運動面では、並び順を変えたりしながら、担任から目が届きやすいよう配慮している。

中学校

内容
支援学級に籍をおいて、介助人をつけサポートする。
教職員間での指導記録の保存、共有化等
テストの時間、問題用紙のサイズの配慮
支援学級に籍をおいて、介助人をつけサポートする。
個別に学力面で心配な教科については指導している。
こまめに声をかけ、複数の指示は出さない。
保護者と連絡を密にし、緊急時における対処方法を確認(てんかん発作時の投薬含む)。全教職員に緊急時の対応を徹底。
クラスに入り込んでサポートしてもらった教科もあるし、集団に入れないときは、別室で個別対応している。
校外での行事において、危険を伴う内容は付き添って、頭に衝撃を受けないよう注意している。
通常の学級への入り込み支援(特に課題の確認や授業の進行の補助)。〇〇科は抽出してマンツーマンによる学習支援。

高等学校

内容
空間認知に問題があるため、職員で共通理解して、方向がわからないなど困っている時など声かけして支援する。
視野が狭い症状があり、教室での座席・体育の授業の配慮が必要であった。
体育へは様子を見ながら参加させること、授業中のトイレ容認、教室移動時など声かけを友人に依頼、移動時に急がせない、何度も同じことを質問するが毎回答えて欲しい旨の周知 など
職員、場合によってはクラスで話し、協力体制を作る。
保護者と担任の連携。
学校生活における困っていることの聞き取りとその対応